

「もあるが、駄洒落やオヤジギャグが笑いを誘う軽妙なエッセーも多く、著者の豊かで明るい感性が楽しい。」

「込まれ、心がほっとする。もう一編の『ガード下の小さな本屋さん』はかつてブームになった『一杯のかけそば』

の回し者ではないらしい。発行/日本経済新聞社 定価/1575円
↑このマークのある本をプレゼント。宛先は37ページ参照。本のタイトルをご記入ください。

まちの本屋さん

夫婦二人三脚で営む 小さな本屋さん

冠文堂書店は、まるでかまつまつふみさんの童話「ガード下の小さな本屋さん」から抜け出してきたような、こぢんまりとしたお店。かつては商店街の中にもっと大きな店舗を構えていました。近年大型書店やチェーン店に押され、町の小さな本屋さんがか々と姿を消していく中、このお店も時代の流れに逆らうことはできませんでした。10年ほど前に店の規模を縮小し、現在の自宅を兼ねた場所に移転し

て現在に至っています。

1階の店舗には、絵本や実用書など生活に根ざした本がぎっしり。訪れるお客様は、手芸品の委託販売をする常連さんや、店の片隅に置かれたピアノを弾きに立ち寄る子、一年に1回家計簿を買いに来る人など実にさまざま。さらに本の楽しさを子どもたちに伝えるため、月に1度2階の自宅部分を開放して読み聞かせの会を開催したり、お便りを発行したりしています。その様子はさながら町のサロンのよう。



▲まさに「ガード下の小さな本屋さん」といった佇まい。本の挿絵と見比べてみて

「いつか子どもたちの心に残るような、小さい種まきをしたいんです。ずっとこのお店を続けて、常時読み聞かせのできる場所や喫茶コーナーが作れたらいいなと思っています」と奥様のしづ子さん。そのためにも配達に力を入れるなど、ご夫婦で頑張っています。これからも人びとを

冠文堂書店

仙台市宮城野区福田町1-7-29
☎022-258-3502
9時~20時
第2日曜



冠文堂書店の「本屋大賞」



ルリユールおじさん いせひでこ作

美しい絵で描かれる、ルリユール（製本職人）の丁寧な手仕事。本への愛情が伝わってきて、温かい気持ちになります。

発行/理論社 定価/1680円

見守り、また見守られながら街角に小さな灯を灯し続けていくことでしょうか。



▲奥様のしづ子さんと店主の小野忠敏さん

定評があつて、私も長年敬遠していた。あらためて読んでみての感想だが、その理由のひとつは会話が山形の方言だからではないだろうか。東北出身

者なら理解できると思う。私はすんなり分かったので読みにくさは感じなかった。

内容は、放浪者に近い男が月山のふもとの寺でひと冬を過ごす物語で、ストーリーにさしたる起伏はない。厳しい自然の中で、閑酒を作つて売つて暮らす村人たち、冬を過ごすために主人公の男が凝らす工夫や、寺のじさま（住職は不在）、村人とのエピソードなどが淡々と描かれている。識者の評価は、死を象徴する月山生を象徴する鳥海山を背景に、生と死というテーマを秘めた奥の深い作品というところで、それが芥川賞になり、難解ということになったのであろう。私はそこまで深く読むことは出来なかったが、思ったよりもおもしろかった。雪に閉じ込められる冬、寺の食事は、春になるまで毎日、大根の味噌汁とごはんだけ。寺のじさまが工夫して、汁の実の大根を、扇、千切り、賽の目に切つて入れるということが特におもしろかった。

【お】